

昭和五十五年三月

岩手県文化財調査報告書第四十三集

岩手県「歴史の道」調査報告

仙北街道

岩手県教育委員会

昭和五十五年三月

岩手県文化財調査報告書第四十三集

仙北街道

岩手県「歴史の道」調査報告

岩手県教育委員会

## 序

道・河川などの交通路は、古くから文物や人々の交流の舞台になつておる、本県の歴史を知る上にきわめて重要な意味をもつております。

しかし、近年、産業経済が著しく発展し、社会構造が変遷するなかで、かつては交通が大変不便であった山道も改良され、舗装されて近代的な道路にかわりつつあります。これに伴つて街道の並木・番所跡・一里塚などの交通関係の遺跡も急速に失われてきておりますが、本県では、このような現状を重し、昭和五十三年度から国庫補助を受けて歴史の道の調査を実施して参りました。

本報告書は、本年度に調査した七街道のうち、奥州道中の水沢宿から西へ進み下巣江を経て秋田藩領の仙北郡にいたる「仙北街道」の岩手県分について、街道の現状と文化財の保存状況など、その周辺の環境を含めて総合的に調査し、その成果を集成したものであります。

本書が、今後の交通関係遺跡の保護及び歴史の道研究の一助となれば幸いです。

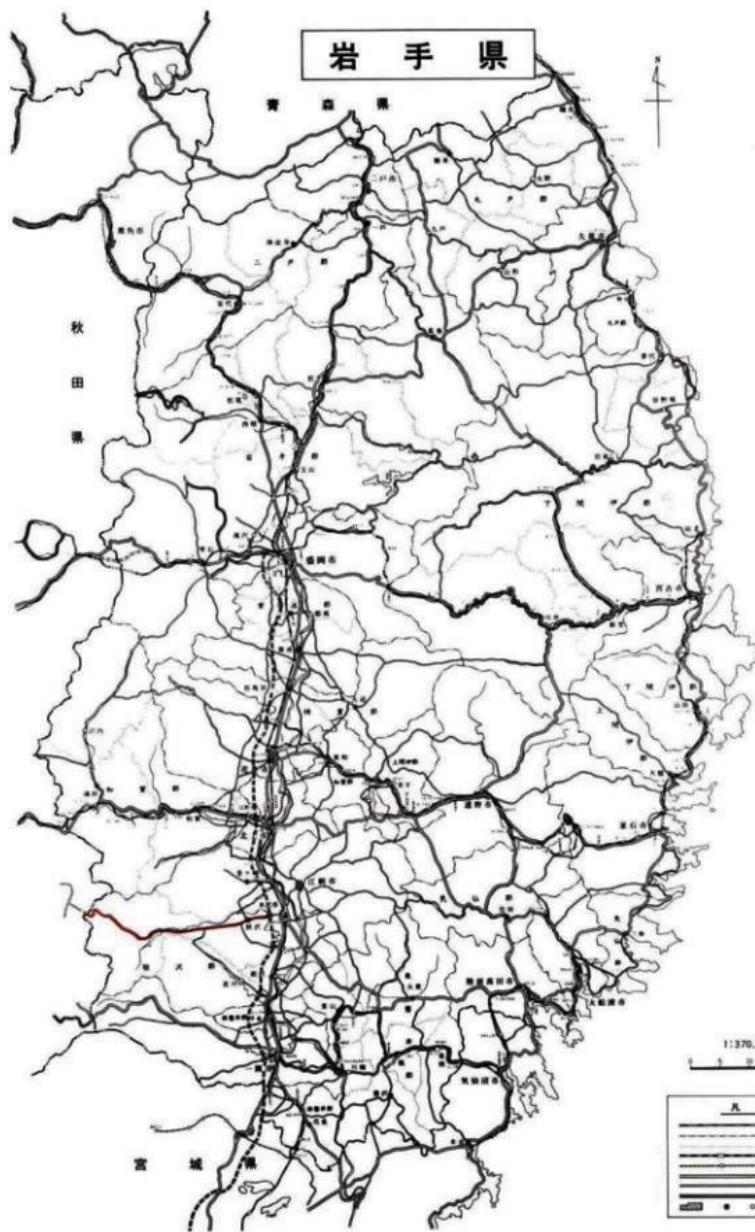
なお、調査に御協力いただきました調査員各位並びに関係市町村教育委員会をはじめ諸資料を提供してくださった方々に対し、衷心より感謝申し上げます。

昭和五十五年二月

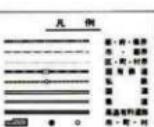
岩手県教育委員会

教育長 新 里 盈

# 岩手県



1:370,000



## 例　　言

一、本書は歴史の道「仙北街道」に関する報告書である。

二、本調査は主として次にあげるものを収集し、調査を実施した。

(1) 収集したもの

古文書、地誌類、紀行文、古絵図や明治時代の実測図など。

(2) 調査した事項

ア 道及びこれに沿う地域に残る遺跡の分布状況と保存の実態。

イ 江戸時代の国界・藩界及び郡名。

三、本調査の調査員・補助員は左記のとおりである。

主任専門調査員　草間俊一　岩手大学教授

専門調査員　繩井計　岩手大学教授

専門調査員　吉田義昭　盛岡市教委文化財専門員

地区調査員(胆沢町) 小原正治　胆沢町文化財調査員

地区調査員(　々) 安倍文之丞　胆沢町文化財調査員

補助員　高橋哲郎　岩手大学文部技官

四、調査の方法は、地区調査員が調査カードを作成し、調査カードにもとづき専門調査員が確認調査を行なった。

五、本書は、主任専門調査員草間俊一が執筆し、文化課が編集にあたった。

## 目 次

岩手県教育委員会教育長 新里 益

### 序 例 言

一、まえがき	.....				
二、仙北道について	.....				
三、仙北道の現状	.....				
四、文化財その他	.....				
写 真	.....				
地 図	.....				
25	20	11	8	7	7

## 一、まえがき

仙北道は水沢より郡島—供養塚—愛宕—市野野—嵐江—柏崎—岩の目沢を越えて、秋田県の仙北地方の手倉に通ずるので、仙北道と呼ばれた。秋田県の仙北地方の手倉から柏崎を越えて水沢に通ずるので、仙北道と呼ばれた。秋田県の仙北道とも呼ばれた。明治になると秋田県に通する道は水沢道または仙台領に入るので仙台道とも呼ばれた。明治になると秋田県に通する道は秋田街道といわれたが、岩手県から秋田県に通する秋田街道はいくつがあった。(森喜兵衛『岩手近代百年史』岩手県・昭和四九年・二六一頁—二六二頁)（秋田街道）盛岡ヨリ下石橋場ヲ経テ秋田県境仙石峠ニ至ル。一（秋田街道）雪石ヨリ西安庭ヲ経テ山伏峠ヲ越エ新町越中畠ヲ通り秋田県境ニ至ル。一（秋田街道）盛岡ヨリ仙北町栗村ヲ経テ西安庭村ニ至ル。一（秋田街道）黒沢尻ヨリ仙人峠ヲ通り越中畠ヲ経テ秋田県境ニ至ル。一（秋田街道）水沢ヨリ下嵐江ヲ経テ秋田県境ニ至ル。一（秋田街道）磐井ヨリ須川ヲ通り秋田県境ニ至ル。

仙北道については、小谷木治氏が『岩手県史』で、古代から江戸時代までの、この道のもった役割について述べており、最近では水沢市役所資料室の小林吉一氏が『胆江新聞』に「手舟越秋田街道」にこの道についての精い報告を、水沢市真城の鈴木輝男氏が「せんぼく道・せんだい道調査考」を「扇状地」(第一四号)に発表し、その踏査の成果を述べている。今度の調査は調査員の小原正治氏の調査に基づいて、八月二十日と二十二日の三日間小原氏と仙北道にくわしい安倍氏の案内で仙北道の一部を調査した結果によつて報告するものである。水沢から岩の目沢の県境までの長い、しかも失なわれているところの多い仙北道を、実質二日間自転車で案内された位では、到底調査したと云えるものでなく、実地に確かめたい山間部の道も多くあって、誠に不充分であるが、一応予定の調査は終つたという県教委の考え方があるので、知り得た範囲で報告することにした。

## 二、仙北道について

古代から中世にかけて、日本海側の秋田県と岩手県を結ぶ、最も主要な道は仙北道であった。というのは、古代から中世まで、水沢は胆沢城の築城にはじまって、岩手県では最も中心的役割を果したところであった。従つて、出羽方面から水沢へ来る道といえば仙北道が利用されたのであった。今日、北上市から横手に出る北上線沿いの、黒沢尻から和賀—川尻—越中畠—白木峠が多く利用されていたようと考えられるが、これは江戸時代以後のことと、江戸時代はじめの、内閣文庫所蔵の正保大絵図には、この道は記載されていない。従つて、前九年、後三年の役で、清原武則が救援の際通つた道も、源義家が沼の機を攻撃するために通つたものこの道であった。

中世、曹洞宗の本山、黒石の正法寺に学んで永徳寺(第四節2参照)を開いた直重道安は、仙北地方の増田在の生れと云われ、恐らく、この道を通つて正法寺に学んだものであろう。永徳寺の末寺も仙北地方に多くある。近世の初め後藤寿庵などの關係で水沢地方に栄えたキリストンが、出羽地方に伝播した道もこの道であった。藩政時代に増田村に「キリストン御改札場」が設けられたのもそのためである。

明治時代となり、県都が盛岡となつて行政が行なわれるようになると、事態は著しく変つた。北上川流域から仙北地方に行くのに、盛岡から駒一南畠—川舟を経て秋田県に行く道と、黒沢尻から川尻—越中畠を経て秋田県に行く道がある。水沢から岩の目沢の県境までの長い、しかも失なわれているところの多い仙北道を、実質二日間自転車で案内された位では、到底調査したと云えるものでなく、実地に確かめたい山間部の道も多くあって、誠に不充分であるが、一応予定の調査は終つたという県教委の考え方があるので、知り得た範囲で報告することにした。

住田線として開通し、県道となった。この県道も脇沢町の馬留以西は、旧仙北道が脇沢川の西側を通り、東側に開通することになったので、馬留以西の旧仙北道は全くその機能を失い、利用されることもなくなって、地図上に記載されても、現在その道をたどることも出来ない状態である。馬留以東も大巾に改修されているので、旧仙北道の面影を残すところはごく僅かにすぎない。殊に供養塚と水沢市との間は開田などとも重なり、道路も大巾に変更されている。以下、その精細について述べる。

### 三、仙北道の現状

(本文のわきの注の番号は第四節の番号参照。また(図)とあるのは図版参照)

奥州道中から仙北道への分岐点は、元禄十二年作成の「上伊沢郡繪図」(元禄十五年五月生江助内國安政四丁巳年閏夏忠次郎等之、脇沢町教育委員会保管)によると、袋町から分れたもので、北の大安寺から袋町に出る付近で、袋町から南に現水沢公園の方に行く道があり、それが、奥州道中からの分岐点であった。その後道路に若干移動があったのか諸説があり、水沢市教育委員会では、公園付近の佐藤善八氏の隣りを分岐点として、標柱を立てているが、その根拠は明らかでない。

仙北道は現在の水沢公園下の道路を西に、駒形神社<sup>(3)(4)</sup>の前に出て、駒上りに向ついた。現在の駒上りのバス停宿所の手前附近に、里塚があつたが、現在は全く痕跡もない。更に、西に進んで、水沢練度觀測所の門の前で、仙北道と衣川への道とが分れていて、そこに道標が立つ<sup>(5)</sup>。この道標は現在日高神社境内に移されている。

衣川への道は、現在練度觀測所のため若干変更している。西に向う仙北道は、大体むかしの道筋に沿つていているが、東北高速道路に開通して、道路が高架

橋となつたり、開田や自動車交通のため著しい改修がなされ、舗装もされて、むかしの面影は全くない。道路も直線的に修正されている。

仙北道の水沢市と脇沢町との境界は、江戸時代塙釜村と南下幡村との境界で、「おくり場」と称されている。当時、虫送りの行事が行なわれ、虫送りの行列がここまで来る習慣があつたとの事である。更に、西に進むと、塙の越の道路の北側に高さ一四ほどの中塙<sup>(6)</sup>があり、古墳であろうと云われているが、未調査のため明らかでない。もし占墳とすれば、一・五回ほど北にある国指定の角塙に類似するものである。その塙の上に石碑と共に道祖神としての金精樓が祀られている。

塙の越から西に進むと道路の両側、ややなれて宝寿寺がある。この宝寿寺の手前に、松若寺・本済寺・香林寺が道路の両側に位置していたが、「安永の風土記」の頃には、既に移転して寺跡として記録されている<sup>(7)</sup>。現在は開田によつて、その痕跡もなく、水田となつていて、宝壽寺だけはむかしの位置に現存している。この付近のむかし屈曲した道も、大巾に改修されている。そのため、古繪図によると、宝寿寺の東北方の道路の両側に一里塙があつたが、現在は痕跡もない。また、古繪図によると、宝寿寺の向いに牧野屋敷・飯坂館・国分館<sup>(8)</sup>が記されているが、その位置は推定出来るが、むかしの面影はない。

国分館の西側で、古繪図では仙北道に交叉する道が走っている。その分岐点に、宝曆四年の道標が、東西して立つていて。現在その道標は反対側に西面して立つ<sup>(9)(10)</sup>。道路改修の際に移動したものである。「北はせんほく道、南はやまかい道」とある。この分れで、東南方に進む「やまかい道」はその痕跡が残っているが、西北方に進む仙北道は、林福野の名主屋敷まで、開田によつて全く喪失してしまつていて。この山街道は仙北道の古道であろうと小原氏は云つているが、精細は明らかでない。

林福野の名主屋敷のところから、松原の名主屋敷までは、一部仙北道の名残を留めて、旧仙北道のあとをたどることが出来る。なお、林福野の名主屋敷の

ところが、仙北道と柳田村への分れとなつていて、道標があつたと云われ、小原氏の記録によれば、「北やなぎ田への村みち、西せんほくみち」とあつたとある。松原の名主屋敷のところは、現在の民家の北側が、仙北道のあとといわれている。<sup>(2)</sup> 松原から供養塚までの道路は、もの的位置であるが、大巾に改修舗装されている。

供養塚で旧仙北道は、秋田卜文字と氣仙郡世田米と結ぶ県道に合流し、これからは馬宿まではほぼ県道と重なつて旧仙北道は通じている。供養塚はむかしから、道の分岐点になつていて、道標は二基あり、その他一字一石の供養塚があつて、地名となつたものと考えられる。

供養塚から西に進む仙北道は、今日の県道とほぼ重なつて、県道は巾広く改修舗装されて、旧道の面影は全くない。ただ県道が旧道とそれているところに、若干むかしの面影を残している。例えば、青森壇のところは、壇の南わきを通り、鳳凰寺の門前を過ぎて、西田屋敷の長尾門の前に通じていた。<sup>(3)</sup> また、荒谷は旧道より県道が南を通つたので、旧道が最もよく残つてゐる。<sup>(4)</sup> 供養塚からの現在の県道と離れた南に山下の渡辺金次郎氏の宅地がある。この宅地北側の道路わきから、道標が出土したと云つて、現在宅地両側の田の畔に立ててある。<sup>(5)</sup> 道標には記年銘がなく、表面は風化して一部読みとれないところもあるが、次のように刻んである。

西に進むと、県道北側の畑の中に道標が立つていて、県道改修の際に移動したものであるが、仙北道から北側の胆沢川を渡つて向いの山間にあつた鹿合鉱山への分れになつて、鹿合道は旧道の面影をとどめている。

その分れから、若下西を行つた、道路南側に赤松の古木が立つて、位置が裏表の七里塚と云われ、一里塚のあとである。往五町位のところが、一町くらい高くなつてその上に赤松が立つてると云われたが、周りの樹木に覆われて塚らしいとは明らかでない。反対の北側にもあつたが、昭和三十二年の強風で倒れて今はないと云われるも、そこにも塚らしい盛土の痕跡は認め難かつた。仙北道の一里塚乃至七里塚と云われるところは、余り高い塚を築いたものでないらしく、その他でも塚らしい盛土の状況は認め難かった。

七里塚であるが、岩手県で大正十一年一里塚の調査を行つた報告によると、

いた仙北道があつたものか、もつと古い仙北道がここを通つていたものか明らかなではない。

出店は仙北道より永徳寺への分れとなり、中世、永徳寺が繁榮していた頃、ここが宿場のようになつてしたものか、出店の地名が残つてゐる。現在は新しい道路がものとの道より西に巾広く開通している。

出店から西に進むと、県道南側に趙薄桜があり、彼岸桜の古木で、春この付近の部落で種類を説く日安にしたといわれている。

更に、西に行くと、於呂門志・肌沢川神社の南わきを通る。これは明治初年に、ここに両神社が合祀されたものであるが、仙北道は神社への参道を通つて神社のわきで、寿安塚を渡つたものと見られた。

仙北道を西に進むと、北側に徳水園がある。<sup>(6)</sup> 戦後、石淵ダムの建設によつて胆沢平野の大規模な土地改良がなされた際、土地改良区によつて作られたものである。しかし、胆沢平野の水田耕作に大きな貢献をした寿安塚と茂井塚のものである。

西に進むと、県道北側の畑の中に道標が立つていて、県道改修の際に移動したものであるが、仙北道から北側の胆沢川を渡つて向いの山間にあつた鹿合鉱山への分れになつて、鹿合道は旧道の面影をとどめている。

その分れから、若下西を行つた、道路南側に赤松の古木が立つて、位置が裏表の七里塚と云われ、一里塚のあとである。往五町位のところが、一町くらい高くなつてその上に赤松が立つてると云われたが、周りの樹木に覆われて塚らしいとは明らかでない。反対の北側にもあつたが、昭和三十二年の強風で倒れて今はないと云われるも、そこにも塚らしい盛土の痕跡は認め難かつた。仙北道の一里塚乃至七里塚と云われるところは、余り高い塚を築いたものでないらしく、その他でも塚らしい盛土の状況は認め難かった。

七里塚であるが、岩手県で大正十一年一里塚の調査を行つた報告によると、

七里塚として報告されているものは二十数か所（このうちに脇沢町の若柳の以下ものは入っていない）に及んでいる。六丁小一里とし、六×六＝三十六丁の人一里でなく、六丁を小一里とし、六×七＝四十二町の大一里としたので、七里塚と呼んだものであろう。南部著でも「宮古江之新道七里塚印相立」（『岩手県史』第五卷一二五七頁）とあり、実際には七里塚も「あつたことが考えられる。

仙北道は更に西に進むと、南側に愛宕神社があり、高さ十寸位の道路わきの流紋岩の岩塊の上に小祠を設けたものである。林尻の県道の南側に七里塚がある（図）。坂袋の七里塚と同様、道路わきの樹木に覆われ、塚の形を確かめることができない状況であるが、小原氏の報告では高さ一田ほどどの盛土があると云う。道路の反対側の南側にもあったが、大正二十年頃賀林署の軌道監視の際にわざとのことである。

市野野部落の東端で、西の仙北方面から来た道が、今までたどって来た水沢へ向う仙北道と前沢方面に道とが分れていて、そこに道標が立っていた。「右はまい沢道左は水沢道」とある。その分れより少し西に行った道の北側に水路を隔てて、南面した三間に五間半の縁側のある建物があつて、これが市野野の番所であったと『岩手県史』にあるが、現在の県道は少し北に寄りすぎているが、番所のあったところとしては狭い感じである。この番所は下巻江にあつたものが、寛文三年（一六六三）に移されたものであると『安水の風土記』にある。番所には郡方横目や足輕が配置され、當時二人の役人が交代で旅人や物資流出などを監視していた。

市野野から馬留までの仙北道は現在の県道より南より曲って通じていた。旧仙北道は馬留からは県道より南側にそれ、矢尻山の北側の山麓の傾斜面を駆け下る渓谷を見下ろしながら通る狭い危険な山道を通って、現在の石淵ダムの堰堤のところに出た。水沢から来た仙北道の第一の難所で、荷をつけた馬の通行は困難で、荷なし馬が漸く通行出来る通路であったので、馬留めの地名とな

ったものである。現在この通行は道あっても狭くすれなどあって通行出来ない。そこで現在石淵ダムとなって湖面下になっている脇沢川畔に出た。ここから猿山神社へ登る道の分れがあり、道標が立っていたが、現在、石淵ダムのサイドの道路わきに他の石碑と一緒に立てられている。寛政元年（一七八九）のもので「右へをろせん通せんふく道 左へさる山社洞通」とある。猿山神社は猿山の頂上近くにある。

仙北道は前川を渡って、下巻江の部落に出た。しかし、元禄十一年の古絵図によると、仙北道は脇沢川畔に下り、山の傾斜を通る整所をすぎて、猿岩の南側を通る山のあいの道を通って、前川の川岸に出、川を渡って下巻江の部落に出たようである。この道は溪谷に橋を架け、そこを渡る危険があるので、川畔の道を通つたららしい。

下巻江は江戸時代のはじめ、近くに金山などあって栄え、番所などもおかれたた。

下巻江から西南方に丘陵に登つた野かしらは、仙北道と金山道の分岐点で、現在道標が残つておらず、旧道らしい痕跡を認めることが出来る。

この野かしらの分岐点から西に通る仙北道は、五万分の一の地形図には記入されているものの、現在全く使用されず、山林の中にかくれて殆んど見きわめがつかない。案内してもらつた安倍文之丞さんは、愛宕に生れ育つて、少年の頃この道を通つて秋田へ行ったと云わたが、現在は道をしていない。水沢市の鈴木輝男氏は「せんぼく道をよみがえらせる会」を作り、昭和五十年から五十三年までに、下巻江から手愈までの間を七回に亘つて、この道の踏査を行つた結果、前記の現状地に発表している外、実地に踏査した人はいない。その報告によると、古絵図にある一里塚も一部は存在し、旧道のあとも残つていると記されているが、全体を通して、そのあとをたどることは困難で、全く通り人もなく何年かきていて、殆んど失なわれているといつて差支えない。

また、小林首一氏は、前記報告書に菊池慶治氏資料並びに古文書によるとし

て、下風江から一里岬まで、次の如く記している。

「下風江——野から（追分石あり、右せんたい。がやまみちと刻す）（追分・ふまと塚）ここから次第にのぼり道——小くるみ（標高七八二メートル）——あとれ坂（大くるみ山にいたる坂みち）——大くるみ（標高九二七メートル、追分より一里半、七曲をのぼり神につく。蓋生地なり）——又鬼坂（やや下る坂）——つなぎ沢（小屋二軒あり、この沢約半里、追分より約一里、追分よりはじめて水あり）——とち川（落合）（つなぎ沢とち川の落合、道は川に添うて下る）——龜の子（ここより（下）出まで半里）——生出川（肌沢川の上流から分れている支流、追分から三里）——お助小屋（世小屋で鍋や椀がそなえてあった。夜の飯や、これから手舟まで三里、この山みの丁度中間）——中山小屋（旧藩時代の荷物中継所）——こうじう（栗ばたき）——篠道わかれ（篠森）——山神（石の祠あり）——柏崎（かやとうげ、中山峠、標高一〇一八メートル、眺望のまくところ）——一本（ひき沼（伝説あり）——しよのぐら——岩の日（岩野目沢）（駿境、藩境）二つあり、ここから手舟まで一里十町）——十里寺（手舟より小里十里あるのでこの名あり、小道六里は大道一里）（日下路）」

また、宝曆十一年（一七六一）の『奥州仙台領遠見記』には次の如く記されている。

「下風江人家の外、此先へ御境まで、五里拾六丁ありといふ。人家なし。お札屋より先御駒堂とて小山あり。夫より南西へ向う峯をくるみ峯と云。其次大山を大くるみ峯とて峯道のよし。是を西南へ行被付という所難所なり。その先おいで川と云あり。『上伊沢水』此所におさこ橋有り。湯水の頭は歩渡の由。其次中山といふ。此所に仙北領江の通用山小屋（おおむね此所に御物入道用居候よし、下に木舟泊め有りし。）の先かせが峠といふよう。此所に御境塚二つ有よし。何年に築しと云事へしらず。大き成家よし。」

なお「上伊沢郡松岡」には、この間一里塚が四か所記入されており、岩の日

には藩境塚があるが、鈴木輝男氏は踏査の結果、藩境塚は確認しているが、一里塚については報告されていないので明らかでないが、現状変更がない限り存在するものと思われるが、実地に踏査する計画がくまれなかつたので、以上参考資料をあげおわりとする。

#### 四、文化財その他

##### 1 仙北道入

水沢市上野町の佐藤善八氏の隣りの道の角が、奥州道中から仙北道の分歧点に当るとして、水沢市教育委員の標柱が立てられている。『上伊沢郡の古図』によると、本文に書いたように袋町で、奥州道中から分歧していたようである。

##### 2 塩竈神社・愛宕社・駒形神社

水沢市中上野町の駒形神社とそれに隣接する水沢公園一帯は、市街地より一段と小高い丘で森をなしている。江戸時代のはじめに愛宕社（羽黒派修驗の堂宇）があった。愛宕社の西側に明和二年（一七六五）宮城県の塩竈社を勧請した。それは水沢領主となつた留守氏が中世に陸奥一の宮の塩竈社がある土地を領有し、その神主として実権をもち、社人を支配し、その神社を崇敬していたので留守氏が水沢の領主となるや、旧領の塩竈社をこの地に勧請し、崇敬したものである。

明治維新となって、藩も廢せられ、明治四年駒形神社が国幣小社になると、塩竈社を傍にあった春日社に遷座し、塩竈社を駒形神社の遙拝所とした。駒形神社は延喜式内社の一つで、金ヶ崎町、和賀町との境界にある駒ヶ岳（一二八三）の頂上にあり、社殿は金ヶ崎町にあつた。絶壁の頂上に位置し、一般の人々が参詣するのに困難であったので、明治四年岩手県唯一の国幣社となるに及んで、前記の遙拝所を作ることになった。その遙拝所も明治三十六年には本社

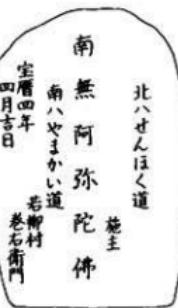
となり、駒ヶ岳山頂の旧本社も奥宮として、今日にいたっている。

以上のように、駒形神社の境内は、江戸時代領主飯守氏の崇敬した塙齋社のあったところで、その保護も行き届いていた。当時植えられたヒガン系のサクラの古木が良く生育し、何れも二〇〇年以上たってい、桜の名所となつてゐる。これらの桜は隣接する水沢公園分の桜と合せて、「駒形神社及び水沢公園のヒガン系サクラ群」として、岩手県指定の天然記念物となつてゐる。また、水沢公園内には、高野長英記念館も建設されている。

### 3 星ヶ丘町の道標

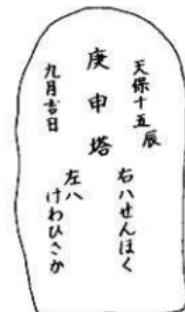
水沢練度観測所前の星ヶ丘町の道標は、現在、日高神社境内にある（本文参照）。

#### ① 宝曆十年（一七六〇）二月上旬の碑（地上高さ六二〇m）



天保十五辰  
庚申塔  
九月吉日  
左ハ  
けわひくか

#### ② 天保十五年（大八四四）九月吉日の碑（地上高さ九〇〇m）



### 5 塚の越の占塚と道祖神（本文参照）

道祖神の現高一〇〇m

### 6 松岩寺跡、香林寺跡

仙北道は片子沢川を渡った北側に本淨寺、その向いの道路の南側に、松岩寺、香林寺があつたが、この地の旧領主飯坂氏の建立したものであつたが、貞享年中退転の際、移転し、本淨寺は前沢町の白鳥に、香林寺は江刺市伊手町に松岩寺は江刺市片岡に移転したと、『安永風土記』に記されている。

### 7 本淨寺跡

### 8 宝寿寺

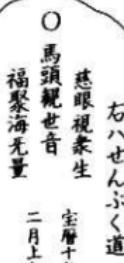
曹洞宗、宝蔵山宝寿寺で、永禄七年（一五六四）開山と伝えられ、今日に至つてゐる。

### 9 飯坂郷跡

中世末期、飯坂出雲守の居城があつたと云われるところで、『安永の風土記』に広岡館南北七拾六間、東西六拾間とある。最近まで主屋の西北隅の一部があつた。この付近の仙北道は柳形になつていてと云われる。『上伊沢詳繪図』にはこれに隣して國分館が記されている。中世末まで國分氏の居館で、宝寿寺の大檀那部であつた。

### 10 四分四の道標

#### 宝曆四年（一七五四）四月の道標（地上高一〇〇〇m）



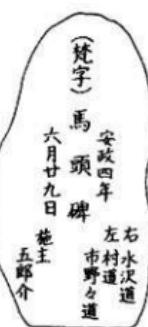
## 11 林福野の名主屋敷（本文参照）

12 下松原の名主屋敷（本文参照）

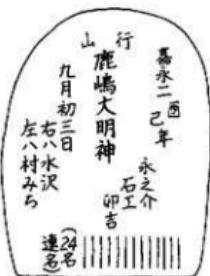
## 13 供養塚の道標

供養塚は県道十文字田米線と県道折店線（旧仙北道）の分岐点の中心に柳の古木の植った土壇があり、そこに古碑がある外、道の東側住宅のわきに古碑が立っている。「安永の風土記」に「一供養塚古碑<sup>古碑六石</sup> 宝永年中当村肝入三郎兵衛一字一石供養法華經建立埋葬供養塚に御座候」とある供養塚は現存する。なお、風上記にも道が二筋に分かれていると記されている。

① 安政四年六月廿九日の道標（地上高六二四）



② 嘉永二年（一八四九）の碑（地上高八〇〇）



## 14 青海壇

風土記に「世之行人葬供養之由申伝」とあり、現在、鬼井姓の墓石が集められて、壇を作り、その近くに赤松の古木が生えている。

## 15 凤凰寺

曹洞宗、松原山鳳凰寺で、寛政元年（一四六〇）開山と伝えられ、永徳寺の末寺である。

## 16 西田屋敷

尾敷はものままであるが、母屋と長屋門は改築したものである。屋敷の前に供養碑がある。

## 17 幅の下道標（本文参照）

## 18 菓谷旧家列群（本文参照）

## 19 大日堂

「安永風土記」にも記載されているが、現在の堂は嘉永六年（一八五二）再建されたものである。

## 20 七瀬観音堂

「安永風土記」にも記載され、千手觀音が安置されている。

## 21 出店の山神社

「安永風土記」の「通師の山神社」に当る。

## 22 出店

仙北道より、金ヶ崎町の永徳寺への分岐点に当り、門前町をなしたのか、出店の地名が残っている。分岐点には元文五年（一七四〇）と寛政三年（一七九一）の古碑がある。永徳寺は正平十一年（一二五六）に道災によって開かれた曹洞宗の出世道場で、当時門徒五百八寺と称せられるほど栄えた寺院である。江戸時代は寺領も削減されて、往時の繁榮は見られなかつた。

## 23 種稻き桜（本文参照）

## 24 於呂開志・朝沢川神社

於呂開志神社、朝沢川神社は共に延喜式内社であるが、明治初年にこの地に合祀されて社殿が作られたものである。「安永風土記」によれば、朝沢川神社はもと朝沢川端にあったが、川欠によつてなくなつてゐた。於呂開志神は巖江

の猿山神社としてあったものである（後述38参照）。

25 寿安裏橋

「安風土記」に「仙北領より当郡水沢町江之通路」として、寿安裏と北在の家橋が記載されている。北在家橋の位置は殆んど変らないが、寿安裏橋は現在の神社の横の橋あたりにあったと考えられる。

26 徳水園

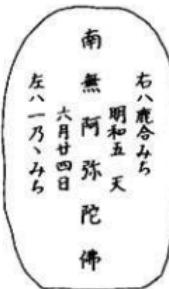
穀倉地帯の胆沢平野の水田は、胆沢川からの灌漑用水の開鑿にまつところが大きい。その点で、寿安裏と茂井瀬橋の名を忘れることが出来ない。石淵ダムの建設に伴って、両堰は大巾に改修され、胆沢平野に更に広く灌漑することになつたのを記念して作ったものである。

27 明和五年（一七六八）堰袋の道標（地上高六〇四メートル）

仙北道より、江戸時代篠山のあった鹿合への道の分歧点に道標があつた。現在の県道は改修されているが、鹿合への道は旧状を保つている。

右八鹿合みち  
明和五年  
阿弥陀佛

六月廿四日  
左ハ一乃みら



28 堰袋の七里塚（本文参照）

29 金入道屋敷と馬頭観音堂

風上記に記載された屋敷と観音堂で、観音堂には享保九年（一七二四）の木札がある。ほかに松も多數ある。

30 愛宕神社（本文参照）

31 林尻の七里塚（本文参照）

32 猪鼻館

中世の館跡であろう、空堀などがある。

33 市野野の享保十九年（一七三四）道標（高さ八五四メートル）

右はまいさわ道  
す様十九年 上伊沢若柳村 高橋初十郎  
左は水沢道

仙北領から来て、ここから水沢への仙北道と前沢への道が分れていた。仙北道も前沢への道も若干変更している上に、巾広く改修されているので、もとあつた位置から移動して、現在道路の北側の石碑群の中にある。

34 市野野の番所（本文参照）

35 天沢の御駒社

「風上記」に記載されている馬頭観音堂で、羽黒源修院明性院が管理して、堂宇も多かつたらしいが、現在小祠が一つあるにすぎない。

36 弘法の枕石

安山岩。上面が平らで横円形大きな石である。大きさは高さ二五四メートル、長さ四七〇メートル、巾二五四メートル。弘法大師枕石と伝えられている。現在湖になつて、湯水期にあらわれる。

37 石淵の寛政元年（一七八九）の道標（高さ一六四メートル）

寛政之年右ハをせき通せんべく道  
南無阿弥陀佛  
八月二十三日左ハ々々から山社祠道

外石碑が五基ある。

38 猿岩と於呂門志神社

猿岩は船沢川と前川との合流点の南岸に、比高百丈ほどそびえ立つ石英安山岩質堅灰岩の一大巨峰である。その山の南面、頂上近くに猿山神社がある。猿

山神社は「安永風土記」にも於闇志神社に当るものと記されている。現在は參詣する人も稀である。

この猿岩の頂上附近のブナの山林下に、ユキツバキが咲く五月下旬から六月上旬にかけて、タムシバ（ニオイコブシ）の花と一緒に真紅のツバキの花が、残雪に輝く焼石速峯を背景にブナの新緑に映えるのは見事で、「猿岩のユキツバキ」として県指定の天然記念物となっている。

### 39. おさこ橋

宝暦十一年の「奥州仙台領通見記」に「利川におさこ橋有り、両方より長木二本へ細木四・五尺計なるをおさこのことく。かき付はね出しにかけたる橋也。中拾間計往なし。橋の高さ老丈四五尺も有へし。危くみゆれど渡りかねるほとにあらず。所の者は荷をかけわたるなり。」とある。

### 40. 下巻江町

万治二年（一六六〇）より寛文三年（一六六三）まで番所があつたが、後市野野に移された。「安永風土記」によれば町とあるが、町場はないが屋敷十八軒とある。水沢町を除いて仙北道の岩手県内では最も屋敷数が多い。西南方一里十二丁余のところに茂民沢という金山があり、中世から江戸時代はじめには相当繁昌したらしく、江戸時代のはじめキリシタンもこの鉱山に遭れたことは、「下巻江村のキリシタン八十人は、谷間に退いて神父（デ・カルバリオ師）の隣りに隠れ家を建てた。……」（日本切支丹宗門史第二編・第九章寛永元年）とある。千軒原の俗称も人夫小屋が多數あったことを示すものである。その金山の根拠地になっていたが、江戸時代にはそれも衰えて、仙北道の山越の根拠地となつた。明治十四年にも人馬難立営業が認められていた。現在、石淵ダム建設に伴つて、集落の人々は四散し、そのあと樹木が繁茂して、集落の痕跡は全く認め難い。

### 41. 山の神

42. 馬頭観音堂

むかし、集落の名残として、共に小祠を留めるにすぎない。現在參詣する人もなく荒れている。

### 43. 野かしらの道標

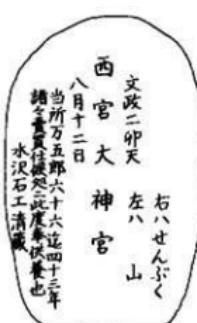
### 44. 明和二年（一七六五）の道標

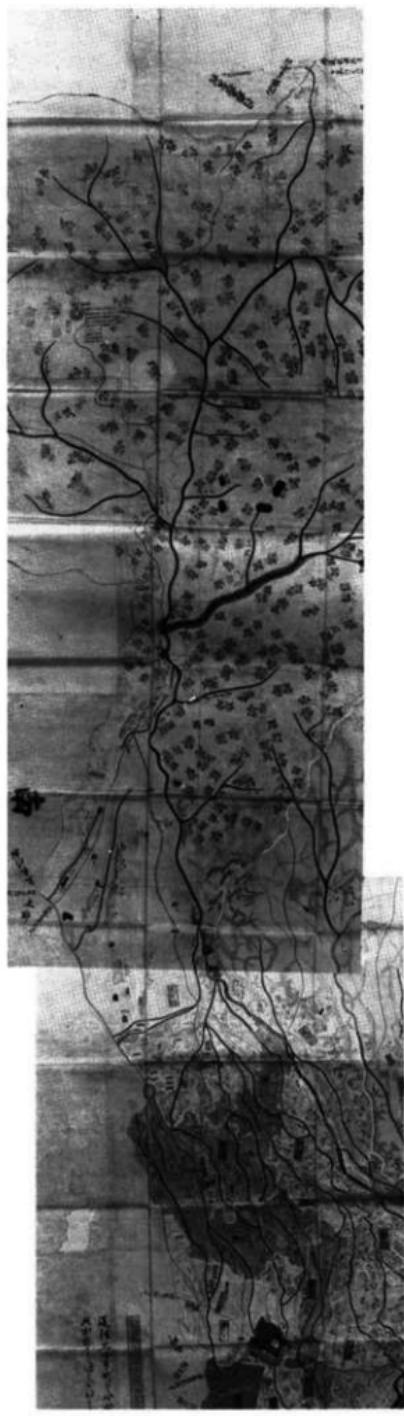
みぎハせんほくみち  
ひだりハかね山みち

南無阿弥陀佛

四月

(b) 文政二年（一八一九）の道標（高さ八〇cm）







水沢市 旧仙北道入口の標柱



水沢市星ヶ丘町 写真(左)の道標のあった分岐点



水沢市 道標(現在日高神社にある)



脇沢町 雪場並びに道祖神



脇沢町 道祖神



脇沢町 宝寿寺参道



胆沢町 国分西の分岐点と道標



胆沢町 左の道標（国分）



胆沢町 名主等屋敷（林福野） 旧道の一部



胆沢町 下松原へ通ずる旧道  
(現在は田になっている。)



胆沢町 下松原の名主屋敷南側の旧道の名残



胆沢町 雪場（供養塚）



相沢町 道標（供養塚・柳の古木の下）



相沢町 道標（供養塚・道路の東側）



相沢町 青海樺あと



相沢町 凤凰寺（この山門近くに一里塚があった。）



相沢町・西田・名主等屋敷（旧道は、この長屋門の前すれすれに  
通った右は現在の県道住田～横手線）



相沢町・荒谷・名主等屋敷付近の旧道



相沢町 丹波大日堂



相沢町 左下写真の道標がもと建っていた場所



相沢町・福の下・道標



相沢町 この林へ向うのが衣河道である。



相沢町・出店・永徳寺への分岐点



相沢町 於呂開志相沢川神社



胆沢町 於呂閉志胆沢川神社の古碑群



胆沢町・徳水園・古碑群



胆沢町 勇安碑



胆沢町 茂井嘉碑



胆沢町 現在の勇安堰の水路(とり入れに近く)



胆沢町・環状道標



胆沢町「檜まさぐら」



胆沢町 愛宕神社



胆沢町・林尻・一里塙 道路の右側の手前の方



胆沢町・林尻・一里塙の松



胆沢町 市野々御番所跡



胆沢町 市野々前沢道路



胆沢町 市野々～馬留間に残る仙北道のあと。



胆沢町 石淵（橋の向の岩はだの見えるところを通っていた。）「女ころはし」の難所である。



胆沢町・石淵・道標



胆沢町 下嵐沢の宿村があった跡

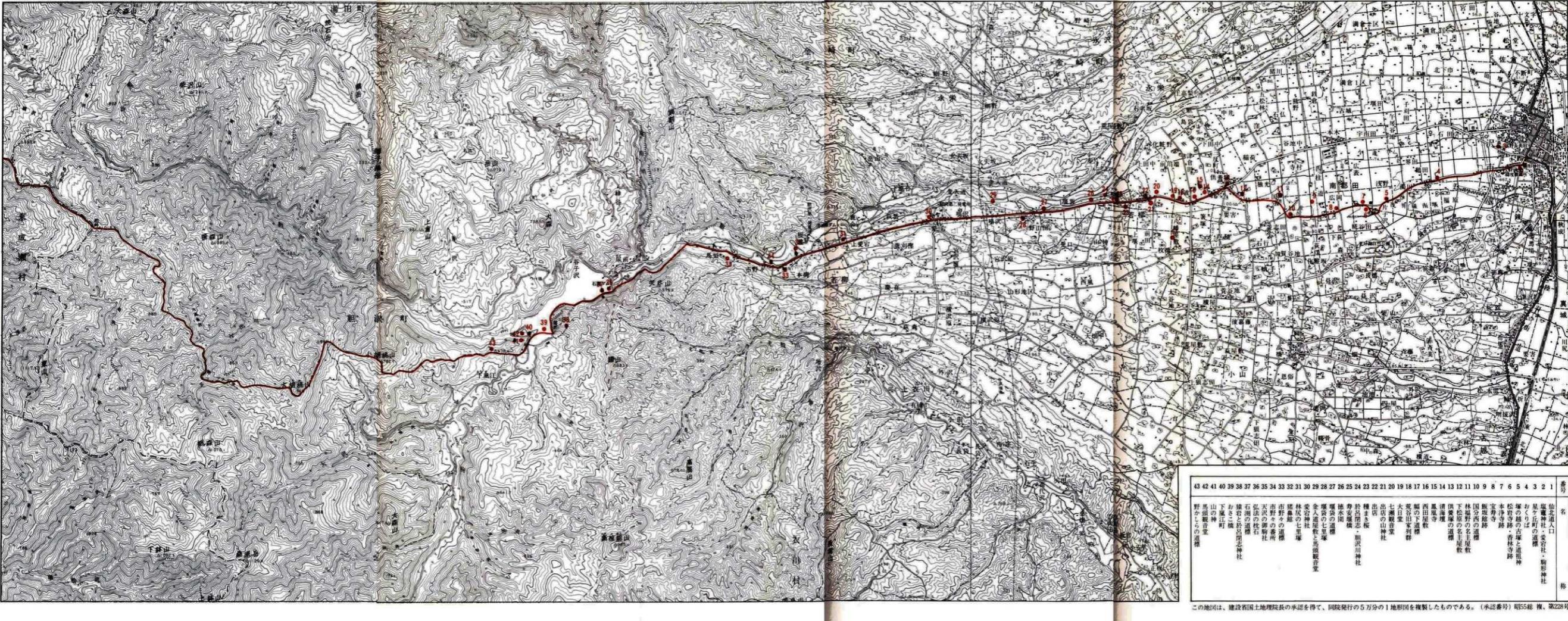


胆沢町 左の道標附近の旧道路



胆沢町・野がしら・道標

仙北街道



岩手県文化財調査報告書 第四十三集

弘北街道

昭和五十五年三月三十一日 発行

編集 岩手県教育委員会事務局文化課

発行 岩手県教育委員会  
印刷 株式会社 熊谷印刷